

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520257

研究課題名（和文） ウェールズとイングランドの国家意識の変遷からみる社会史としての
アーサー王伝説研究研究課題名（英文） The Evolution of Arthurian Legends and National Identity
in Wales and England

研究代表者

不破 有理 (FUWA YURI)

慶應義塾大学・経済学部・教授

研究者番号：60156982

研究成果の概要（和文）：

ドラゴンはブリテンの国家の表象として用いられる場合が多いが、ジェフリ・オブ・モンマス以前のウェールズの資料においては、古代ブリテンの王であるアーサーとは必ずしも初期の段階で結びついていただけではない点を指摘した。また14世紀から15世紀におけるイングランド北西部に分布した一連のアーサー王作品を分析し、写本によって異なる作品の読み方が必要であり、アーサー王伝説が王権の表象として利用されたのみならず、地方の政情安定の表象装置としても作用していることを論じた。

研究成果の概要（英文）：

The Dragon episodes in the Arthurian Chronicles represent ethnological hegemony, and because of his father's name, Pendragon, King Arthur tends to be regarded as a bearer of dragon devices. However, early Welsh sources before Geoffrey of Monmouth's *Historia Regum Britanniae*, tend not to assign the dragon emblem to Arthur, but instead to another Welsh hero.

Various Arthurian romances were produced in and around the north-west of England at the turn of the fifteenth century. This paper argues that these romances require reading within a manuscript context based on reception theory, and points out that Arthurian legends were utilized variously in order to establish dynastic legitimacy but also functioned as assurances of local and domestic stability.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：英米文学

1. 研究開始当初の背景

ウェールズとイングランドにはそれぞれ固有の歴史と民族に基づく「国家意識」があり、その表象としてアーサー王伝説が利用される例が多い。それにもかかわらず、日本におけるアーサー王研究は各時代の作者、個々の文学作品の研究が中心であり、アーサー王伝承を俯瞰する視座をもつ研究はほとんどみられない。

2. 研究の目的

本研究では1の問題意識に則り、「アーサー王」の変貌をウェールズとイングランドの地域性という観点を加え、国家・民族意識がどのようにアーサー王伝承に投影され変貌しているのか分析し、通観することによってアーサー王伝説の再生のメカニズムの一端を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 第一に分析対象をアーサー王の伝承が劇的に変化を見せた1138年ごろのジェフリ・オブ・モンマスの『ブリテン列王史』以降と以前に分類し、モンマスの影響が及ぶ以前のウェールズにおける古資料をもとに、ブリテン島古来のアーサー王像を提示する。そのうえで、アーサーの表象とされるドラゴンがいつの時点でアーサーと結びついているのかを考査する。ジェフリ・オブ・モンマス以前の資料は、断片的に現存する古ウェールズ詩群も考査の対象とするが、ジェフリの『ブリテン列王史』の典拠のひとつでもあるネンニウスの『ブリトン人の歴史』(9-10世紀頃)に初出するドラゴンの逸話に焦点をあてる。ジェフリ・オブ・モンマスの後続年代記である、アングロ・ノルマン語で1155年に書かれたヴァースの年代記、さらにアングロ・サクソン語で書かれたラホモンの年代記を比較し、どのように国家意識の変遷がみられるのか、ドラゴンにまつわる挿話を取り上げ考査する。

(2) ジェフリ・オブ・モンマス以降、イングランドにおいてアーサー王物語の金字塔となったサー・トマス・マロリーの『アーサーの死』が印行される直前の、とりわけ14世紀から15世紀のアーサー王ロマンス群を作品が収められた写本の作品群との関連、読者論から分析する。

この二つの方法をあわせることによって、アーサー王伝説の伝播と展開に重要な二作品への道程をかなり連結させる

ことが可能となろう。

4. 研究成果

(1) ジェフリ・オブ・モンマス以前のブリテン島古来のアーサー王像の表象として通常用いられるドラゴンに注目し、まずドラゴンの形態論を聖人伝などを題材に分析した。現代のウェールズにおいて国旗として描かれている紅いドラゴンは形態的には有翼四足である。しかしながら、ブリテン島に伝わる4世紀ごろの聖人伝によると、ドラゴンはヘビと同義に用いられており、翼への言及はない。火炎を吐くドラゴンは古英語の英雄詩『ベオウルフ』に登場するが、初期ブリテン島に存在するドラゴンは常に火炎を吹きかけるドラゴンではない。またドラゴンという語の意味的な変遷をブリテン島のラテン語用法、およびウェールズ語における用法から解き明かした。そのうえで、ウェールズの古詩「ゴドディン」、時代的にはやや下るがイオロ・コッホの頌徳詩や年代記などを分析し、どの時点でアーサーに対してドラゴンの表象と結びついていたのかを考査した。この点については今後さらに調査を続行しまとめる必要がある。

アーサーは歴史上の一人物とは言い難いが、アーサーが活躍したとされる時代である6世紀前後の古ウェールズ語の詩には初期の段階で、アーサーとドラゴンが結びついていたわけではないことが判明した。またジェフリ・オブ・モンマス以前の年代記としては、ネンニウスの『ブリトン人の歴史』(9-10世紀頃)、後続年代記ではアングロ・ノルマン語で1155年に書かれたヴァースの年代記、さらにアングロ・サクソン語で書かれたラホモンの年代記を比較した結果、ドラゴンが登場する逸話の内容が変容していることが分かった。

ネンニウスにおいて「紅いドラゴンはあなたのドラゴンです」とフォーティガンと同一視されていたが、ジェフリにおいては「紅いドラゴンは白ドラゴンによって抑圧されるであろうブリテン島の人々」となり、白ドラゴンとの関係で存在する。被支配民族としての赤ドラゴンへの視座が存在する。いわば、作者の後知恵として予言が語られ、古代ブリテンの民とブリテンに侵攻する民族のいずれに主導権があるのかは歴史的に証明済みである。またブリテンに侵攻してくる民族もアングル人、サクソン人、ゲルマン人、そしてノルマン人と変化する中で、アーサー王年代記におけるヘゲモニーも同様に変容していくのである。ネンニウスの記述にみられたような従来の紅白ドラゴンは二項対立的な古代ブ

リテン島の先住民対侵略民族サクソン人という図式が比較的明確であった。しかしジェフリの後続であるワースにおいては包含される民族に歴史的な注釈が加わっている。赤ドラゴンは「グレートブリテンで生まれた我々」であり、白ドラゴンはフォーティガンが招来した「アングル人、ゲルマン系アラマン人、サクソン人」と当該民族が拡大されているのである。この時点で歴史を回顧すれば、ブリテン島への侵略を迎える側の民族となり、ノルマン人をも含むグレートブリテンに在住する者たちを意味する。つまり、赤いドラゴンは政治的なヘゲモニーにおいて心情的に劣勢の立場にある側のシンボルのみならず、国家の表象として可変的な存在として作用しつつあることがわかる。

このように、年代記という国家意識の変遷を投影する文献資料に登場するドラゴンにまつわる逸話は、民族間の力関係を示し「予言」する逸話として、異なる記述言語がその対象読者を示すように、ドラゴンの描写にも同時に変容していることをも指摘しまとめた。

(2) 14世紀から15世紀におけるイングランド北西部に分布した一連のアーサー王作品である『頭韻詩アーサーの死』および『アーサーのワズリン湖奇譚』について、ロンドンを中心とする作品群とは異なるイングランドの地方の地域性という観点からの分析、さらに写本のコンテキストにおける受容理論から解釈をおこなう方法など新たな知見を示すことができた。その結果、今回の成果報告書には刊行時期がずれたため記載できなかったが、2007年に国際中世学会(カラマズ)で口頭発表した論文は“A ‘Just War’? A Further Reassessment of the Alliterative Morte Arthure”と題して War and Peace: New Perspectives in European History and Literature, 700-1800, ed. Nadia Margolis and Albrecht Classen (Berlin: Walter de Gruyter, 2010) に掲載されることになった。

また、日本英文学会での招待発表によって、ソートン写本における『アーサーのワズリン湖奇譚』を『頭韻詩アーサーの死』との対論として論じ、新しい解釈を提示した。『アーサーのワズリン湖奇譚』がおさめられている写本は、ロンドンにおけるランベス写本、リンコン大聖堂図書館におけるソートン写本、オックスフォードのボードリアン図書館におけるダウス写本、プリンストン大学のロバート・H・テイラー・コレクションにおけるテイラー写本である。最後の写本はデジタル媒体で取り寄せ、そ

れ以外の写本は直接調査することができた。その結果、『アーサーのワズリン湖奇譚』がおさめられている写本間の物理的な差異を確認することができた。これまで本作品は前後別作者説などが唱えられていたが、写本内には作品を緩やかに挿話の展開に即するようなセクション分けの装飾が施されている写本もあったが、装飾の位置も異なり、ランベス写本においてはまったく区切りがなく転写されていることが判明した。写本はいずれも15世紀初頭から後半のもので、この調査によって、この作品がどのように筆写されたかが明らかになり、少なくとも転写された段階では作品を前半後半と別個の作品として捉えていたとは考えられず、ひとつの作品、一作者として理解することが重要であることを写本の比較によって明示することができたと考えている。

本作品を収める前述の現存写本4本の中で、ソートン写本を今回の論考では特に取り上げた。ソートン写本は、その筆記者ロバート・ソートンから命名された写本だが、リンコン大聖堂図書館収蔵の写本とロンドンの大英図書館所蔵の写本を筆写したことで知られている。今回の論考では両写本におさめられた種々の作品の比較、および作品が収められている写本の折丁の構成とその順番など、写本成立の観点からも考察した。その結果、一つの作品の成り立ち、その読者とその流布のされ方という、広い意味でのアーサー王物語の受容のされ方に切り込む論考を展開できたのではないかと考えている。『アーサーのワズリン湖奇譚』で使用されている方言は、ロンドンを中心とする南部方言ではなく、ウェールズに隣接する北西イングランド地方の方言であること、また作品の中に登場する地名がきわめて地方色が濃いことも特徴的である。作品の後半で登場する騎士はスコットランドに領地を所有した騎士で、アーサー王の戦争によって伝統的に保有していた領地を失ったことへの異議申し立てをおこなう。その調停の一環として、北西部ではとりわけ人気の高い騎士であったガウエインが戦う設定となっており、最終的にアーサー王が争議を収めるという展開をみる。地方の安寧を願う結末といえる。とりわけ、ソートン写本においては、他の写本には欠落している題名、地名がふくまれており、また表現においても特有な繰り返しがみられる。これによって、『頭韻詩アーサーの死』にも描かれる運命の車輪という中世社会において、処世訓としても連想されるモチーフと組み合わせられ、本写本がいかに当時の読者・聴衆に受け入れられていたかを論考することが可能となる。

このように、写本の所有者であることが

判明しているジェントリ階級の読者を対象としていること、またその地域の読みが写本として残存した可能性が高いことを指摘した。この写本間の異同研究によって、写本のコンテキストによって異なる作品の読み方を提示することができ、アーサー王伝説が王権の表象であるのみならず、地方の政情安定の表象装置としても作用していることが示されているといえる。この論文の骨子は2008年の国際アーサー王学会で発表した折に欧米の研究者より評価をされ、近年中にアーサー王研究の専門誌に投稿をするように依頼されている。また第82回日本英文学会における招待発表としてもまとめた内容である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

不破 有理、「紅いドラゴンの行方 ウェールズの伝承およびアーサー王年代記におけるドラゴンの表象」、『慶應義塾大学日吉紀要 英語英文学』、査読無、2008年、1-24ページ

[学会発表](計4件)

不破 有理、「運命の車輪は止まれるか ソーントン写本における中英語作品 The Awntyrs off Arthure at the Terne Wathelyne 再考」、第82回日本英文学会招待発表、2010年5月29日、神戸大学国際文化学部キャンパス

不破 有理、「Maloryの受容史としてのテキスト研究」(シンポジウム「トマス・マロリー研究：日本からの更なる発信」において)、日本中世英語英文学会第24回全国大会、2008年12月6日、大阪府立大学中百舌鳥キャンパス

不破 有理、「The Awyntyrs off Arthure in the Context of the Thornton」、22^e Congrès de la Société Internationale Arthurienne、2008年7月17日、Université Rennes 2、Haute Bretagne、France

不破 有理、「A 'Just War'? - A Reassessment of the Alliterative Morte Arthure」、2007年5月11日、42nd International Congress on Medieval Studies、Western Michigan University、Kalamazoo、USA

[図書](計1件)

不破 有理、慶應義塾大学出版会、『中世主義を超えて』、2009年、426ページ (53-90ページ)

[その他]

ホームページ

<http://k-ris.keio.ac.jp/Profiles/0030/005885/profile.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

不破 有理 (FUWA YURI)

慶應義塾大学・経済学部・教授

研究者番号： 60156982

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし